

ボリビア・ラレカハの農地改革（1）

木村秀雄（自由学園最高学部）

キー・ワード： アンデス東斜面、アシエンダ、先住民共同体、自営農園

La reforma agraria en Larecaja, Bolivia (1)

HIDEO KIMURA (Jiyuakuen College)

Keywords: *Eastern Slope of the Andes, Hacienda, Comunidad Campesina, Propiedad Particular*

1. 分析の枠組

分析の理論的枠組は、『アマゾンアンデス研究』第一号 [木村 2018] および *Senri Ethnological Studies* 111 [Kimura 2022] の論文と同様である。すなわち、「個人の行動とそれが生み出すものは多様であり予測は不可能である」、「多様な行為が生み出したものがパターンを形成する」、「パターンが制度（体系・構造）を作りだす」、「制度が個人の行動を拘束する」、「制度の拘束を逃れる個別の行為が生じる」というもの。

時間を辿る変化を記した文書も用いるが、実際の調査は一つの時期に成立する多様な現実を対象とせざるをえないために、これまで調査した地域の詳細なデータをもとにして論ずる。

今回の発表は地域と経営単位を分類したのち、その統計的分析を行う。個別の経営単位の詳細な分析は次回以降に予定している。

2. 対象地域

ボリビア、ラパス県 (Departamento de La Paz) ラレカハ郡 (Provincia Larecaja) セクシオン・ソラタ、キアバヤ (Sección Sorata y Quiabaya)。サンクリストバル川 (Río San Cristobal)、チラバヤ川 (Río Chilabaya) および両川が合流したリカ川 (Río Llica) 流域の溪谷地帯。

3. ラレカハの歴史

[先スペイン期]

スペイン植民地期の巡察記録によれば [Diez de San Miguel 1964] チチカカ湖岸の政治集団から派遣された人々の居住地が散在していた地域であった。これが、ジョン・ムラが唱えた「垂直統御」のうちで「列島型」と分類されるものである。征服前から現代に至るまで、高地部から亜熱

帯低地への通路・重要な交易路であった。

[植民地期]

アルティプラノの政治集団の支配を逃れてラレカハの先住民村落は自立し [Saigne 1985]、植民地期末期の先住民反乱では Tupac Catari の本拠地の一つで *Republiqueta de Larecaja* (ラレカハ小共和国) と呼ばれた。

[共和国期]

1952 年のボリビア革命においてアルティプラノの Achacachi を中心とする農民運動が波及した地域であり、Wila Saco と呼ばれた Paulino Quispe による大臣殺害事件が起こった場所であり、近年は Malluk と呼ばれた Felipe Quispe に率いられた先住民運動が盛んな地域であった [Muruchi Poma et.al 2008]。また、石油公社民営化の反対運動の一環としての 溪谷の封鎖事件も起こった。

4. 使用資料

[資料]

Instituto Nacional de Reforma Agraria INRA 所蔵資料 (Expedientes)

[地理的範囲]

Provincia Larecaja 分類されているもののうち作成時に 3 つのカントン名 (Sorata, Ilabaya, Quiabaya) と記されたものを抜き出した (資料の作成時に Millipaya は Sorata に、Tintilaya は Quiabaya に属していた)。

[経営体の分類]

アシエンダ (Propiedad Particular con Colono) 自営農園 (Propiedad Particular sin Colono) 先住民共同体 (Comunidad Indígena) の 3 種類に分類。

5. 農業生産による地域区分

[ジャガイモ栽培専業] 商品生産＝高標高部の旧大アシエンダ、自給生産＝高標高部の旧アシエンダ

[トウモロコシ栽培専業] 低標高部の旧アシエンダ、低標高部の小規模自営農園

[両作物栽培] チラバヤ川左岸の先住民共同体および中央尾根の先住民共同体の、標高による栽培作物の偏り

6. 統計上の比較 (1) 所有形態別比較

「平均総面積」「可耕地平均面積」「非耕地平均面積」は、アシエンダ [186.0426 ha、44.4600 ha、141,5765 ha]、先住民共同体 [42.0890 ha、26.6503 ha、15.4387 ha]、自営農園 [5.5833 ha、2.6444 ha、2,9439 ha] となり、アシエンダの数値が最も大きく、次が先住民共同体で、もっとも少ないのが自営農園となった。これは3つの経営体の性格から予想できる結果である。しかし、「総面積に占める可耕地の割合」は、アシエンダが 23.90%、先住民共同体が 63.32%、自営農園が 42.25%となり、先住民共同体の数値が最も高く、アシエンダが最も低くなった。これは農地改革原簿に含まれている先住民共同体が低標高部に偏っていたため、調査地域の先住民共同体の典型的姿を示しているわけではないことを考慮に入れておく必要がある。

7. 統計上の比較 (2) カントン別比較

先住民共同体はカントン・イラバヤにしかなないので除外し、アシエンダと先住民共同体について、イラバヤ、ソラタ、キアバヤの3つのカントンを比較した。比較する項目は、(1)と同じく「平均総面積」「可耕地平均面積」「非耕地平均面積」「総面積に占める可耕地の割合」の4項目である。

[アシエンダ]

イラバヤ [168.6919 ha、37.9894 ha、130.7025 ha、22.52%]、ソラタ [172.5417 ha、44.2353 ha、128.3063 ha、25.64%]、キアバヤ [228.2993 ha、50.8309 ha、177.4684 ha、22.27%] である。キアバヤの数値が最も大きく、イラバヤの数値が最も小さいが、有意の差はない。特に、総面積に占める可耕地の割合には差がない。

[自営農園]

イラバヤ [2.7452 ha、1.7945 ha、0.9507 ha、65.37%]、ソラタ [5.4275 ha、2.4344 ha、2.9931 ha、38.05%]、キアバヤ [8.8033 ha、4.1742 ha、4.6291 ha、47.42%] である。アシエンダと同じく、「総面積に占める可耕地の割合」を除くと、イラバヤの数値が最も少なく、キアバヤのものが最も大きくなっている。

8. 可耕地比較

可耕地について、「アセンダド」「コロノ」「自営農民」「共同体先住民」に分類して、「一人あたりの占有地平均面積」と「土地区画ごとの平均面積」を比較した。

アセンダド [10.3937 ha、1.0951 ha]、コロノ [1.4263 ha、0.3024 ha]、自営農民 [1.9001 ha、0.9305 ha]、共同体先住民 [0.2891 ha、0.1815 ha] となった。

アセンダドの数値が高いのは当然としても、コロノや自営農民との差は小さく、またコロノと自営農民の間の差が予想より少ない。共同体先住民は数値が低い、資料の不十分な性格から確定的なことを言うことができない。

【主要参考文献】

- Diez de San Miguel, Garcí, 1964, *Visita hecha a la Provincia de Chucuito*, Casa de la Cultura, Lima.
- 木村秀雄、2018、「農地改革期クスコ農村社会の多様性と制度」、『アンデス・アマゾン研究』、1:1-54.
- Kimura, Hideo, 2022, *Diversidad y estructura de las sociedades rurales cusqueñas en la época de la Reforma Agraria de Velasco Alvarado, y sus condicionantes ecológicos, históricos e institucionales*, Yuriko Yagi (ed.) *Etnografía Andina: Recorrido y Valoración Cultural, Senri Ethnological Studies III*, National Museum of Ethnology, pp.81-123.
- Poma, Muruchi, Feliciano F. Muruchi P., María A. Morales H., Ernesto I. Herrera L., 2008, *Ponchos Rojos*, La Paz: FODEMPO, Plural.
- Saigne, Thierry, 1985, *Los Andes orientales: historia de un olvido*, Centro de Estudios de la Realidad Económica y Social, Cochabamba.